
東方 ～最強の白虎に俺はなる！～

koreel

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方 ～最強の白虎に俺はなる！～

【Nコード】

N0260Z

【作者名】

koreel

【あらすじ】

朝、普通に起きていつもどおり普通の高校へと向かう。

そして、普通に授業を受けて普通に部活に励む。そして、普通に下校。

普通に寝てみたところ、異常な世界にとんでしまいました。

しかも、気づけば自分は縞模様が特徴の妖獣になっているようだ…。

そんな世界に飛ばされてしまった、狭賀峰 漣。

こつなったら、天下の妖獣を目指すしかない！…彼の運命やいかに…。

本作品は、表現力など国語力をアップするための練習用です。

メイン作品ではないので多少、更新は遅くなるかと思えます。

そもそも、日本の虎はとくに絶滅してる（前書き）

初めまして、k o r e e 1という堕作者です。堕ちちゃってますww

興味4：鍛錬6と言ったところでしょうか。興味本位も、そこそこありますね。

ですが、文章力や表現力などを養うにはもってこいじゃないかと思っただ訳です。

だって、何かしらの超常現象とかが、わんさか出てきますからね。

というわけで、本編スタートです。

そもそも、日本の虎はとつくに絶滅してる

「場所……？んなモン知るか……」

とりあえず、頭ン中が非常にカオスである。混沌状態に陥っている、
だって、いつの間にか見知らぬ竹林の中にいるのだよ……。

ベッドからの竹林……。おまけに、ホワイトタイガーが付いている。

「ちょ、待った！とりあえず、俺は関係ないから。知らないから。

食おうなんて、変な考えはよそうか？野蛮すぎるぞ？ハハ……。」

ホワイトタイガー相手に何言ってるんだろう……。ここ何処だよ？

アジアンチックな場所であるが……。チャイナ……？日本……？

「……？おぬし、喋れるのか？」「うおっ！喋ったよ！遂に、喋ったよ！」

ん……………？しかも、百歩譲ってこの現実を受け入れるとしてだ……。
…。

尻尾が6本もあるんだが……。いや、その前に喋ってるんだよね……。

「ほおっ！2000年目でようやく、我が子の誕生とな！嬉しいのお！」

しかも、既に喋れるのか！ワシの知識が遺伝したのか？」

え……。そういや、やけに視点が低くくね……？肉球発見したぞ……。

純白の体に黒い縦線も見つけた。おまけに、鋭い爪まで……。

「なんで、虎が喋るんだよ？」「そなたも喋っておろう？」「……」

過酷過ぎる……。一万歩譲って虎になったとして何故喋れるんだ？

謎が多すぎるぞ……。仮にここが、日本だとして質問してみる……。

「今はいつ頃なんだ？」「いつ頃か……余所者がたくさん来たのう。」

余所者……？渡来人の事であろうか……？だとすれば、日本である。

大昔でんな……。ここが、日本でなければ話がめんどくさい……。

「こちらのヒトは、他の人間から教わって植物を育てているのか？」

「そのようじゃのう……。この間、何人かの余所者がやってきおった。

」

ということは、日本と確定した。+ヒトの集落に近いという事だ。

水稻が伝わったのは、早くて2500年前程……。辛いなあ……。

大体、紀元前・500年程という事になる。やっぱり、辛いなあ……。

この近くには割かし大きな集落が見える。そこそこ、危険である

それほど、母親？が強いという事だろう。、まあ、白虎だし？

尾が六本……。伝説上の、妖獣の類であろう。しかし、疑問点がある。

日本で虎の化石は見つかっている。それも、数十万年前のモノである。

あー、何かもういいや。考えただけで霧が無いよな……。よし、決めた！

俺は、最強妖獣・ホワイトタイガー漣なのだ！幻の虎なのだ！

「なあ、俺は白虎の妖獣なんだよな？母上。」「そうじゃぞー！！」

すると、新生・my motherはドヤ顔を決めて見せた。

「喜べ、我が子よ！おぬしは、ここらじゃ最強の妖獣の子なのじゃぞ！

ヒトもワシを恐れて、近づきもせんわ！ここら一帯の支配者じゃ！」

なるへそ。まあ、納得のいく話だ。なにせ、六尾の妖獣みたいだし。

玉藻前は有名な九尾狐であるが、虎と比べたらどうなのだろう？

何れにせよ、尾がものを言うのだろう。妖力かぁ……………。

教えてもらっ価値はあるな。それと、名前も欲しいところだな…。

ちなみに、名前の希望は白虎である。本家様と少し被っているような…。

「なあ、母上。俺に妖術と名前を欲しいんだが？だめか……………？」

恐る、恐る、聞いてみたところ何やら、真剣な表情で見つめてきた。

……やベエ……。産まれて、間もないのに生意気を言い過ぎたか？

それとも、子供にはまだ早い！的な感じで終わっちゃうのか……！？

「おおっ！！さすがは、我が子！よかるう。その前に、名前じゃな。

ふむ、おぬしには天下妖獣になる義務があるからのう……。」

おい……親馬鹿。いつから、そんな義務が存在してたんだよ………。

「……よし！おぬしの名は、百虎じゃ！」「まさかの被り……。」

ん、被ってる……。じゃ、じゃあ、姓は天牙あたりかな………？

「姓は……？」「姓も欲しいのか？………じゃあ、天牙じゃな！」

被りに被りまくってますな……。さすが、親子？なのか………？

おっと、そっいや、母親の名を聞いていなかったな。

「母上の名前はなんと言っ?」「そっいや、ワシには名がないのお。」

2000年間・ずっと、名無しだったのかよ…。悲しいな。おい。

「ワシの事は母上でよい。それよりも、妖術を教わりたいのじゃろ
う?」

よいか、妖術の他に能力と呼ばれる自身だけの力があるのじゃ。

例えば…ワシの能力は、『予知できる程度の能力』じゃぞ!」

うはっ!いきなり、チート過ぎる能力が備わってんだな(笑)

「どれくらい予知できるんだ?」「そうじゃのう…災害とかじゃな。」

災害くらいなら、本能的なモノで回避できんじゃね?

「ふん。じゃ、修行に移ろうか!」「自分から聞いといて…………。」

でもまあ、六尾のめっさ強そうな奴だかな。妖力も凄まじいだろう。

「まあ、よい…。妖力もあるようじゃな。」「あ、もしかしてコレ?」

何か、体からじんわり出ている鬱陶しい気体みたいなのが邪魔だった。

…。正直、体質的なモノかと思っていたが…。コレ、妖力だったんだな。

「まず、妖力の制御からじゃ。コレが出来ん事には何も始まらない。妖力を放出する事で色んな技にも応用できるのじゃ。」

また、押さえ込むことで気配を悟られぬようにもなるのじゃ。」

「ほう…。じゃあ、やってみるか。だりやあああ!?!……………」

何も起きない。俺から出ている嫌な気体?も変化しない。何故?

「おぬしは、馬鹿か…。妖力とは、我武者羅に念じてどうこうなるモノ

ではないのじゃぞ！？精神で制御をきかせるのじゃ。よいな？

まずは、目を閉じてお前の妖力と向き合っのじゃ。」

やり方知らねエのに馬鹿はねエだろ…。とりあえず、目を閉じてみる。

神経を研ぎ澄まして、嫌な気体Xだけを感じるようにする。

うおおっ！気体Xが余計、生々しく感じられるようになった！

ここから、放出しろと意識すればよいのだ。……………。

「おお…………。おぬし中々、素質があるではないか！？よいだろう。

次は無意識に、ソレを出来るようになるのじゃ。やってみい。

ワシは夕飯を狩ってくる。妖獣たるもの、幼少から肉を食っのじや！」

まったく、無茶な婆だな…。まあ、その方が抵抗がないかも…………？

いやいやいやいやいや、それでも抵抗は、大有りである。

とりあえず、さっきの感覚で思い思いに妖力をコントロールしてみ
る。

すると、今度は何か別の引っ掛かるモノを感じ取った。何だろう？
あるようでない…。自覚ができないと言ったところだろうか？

「まさか、能力と呼ばれるヤツだろうか……………？自覚できねエ…。

諦めて、無意識で妖力をコントロールする術を見つけなければ…。

┐

初めは難しいと感じたこの修行も、呆気なく終了しましたとき。

ものの五分で直感的にやってのけた。さぞかし婆は驚くだろうな…。

もっと、成果挙げたいと思った俺。よし、妖力でなにかしてみよう！

妖力とはエネルギー質のようだ。放てば強いんじゃない？固めてと…。

とりあえず、虎になって一番扱いやすく感じたこの尻尾！そう、コ
レ！

コイツの先に妖力を固めてみることにした。うん、感度も悪くない。

軽く、妖気を終結させて妖力の弾を作る。命名：妖・力・弾

尻尾の先に固めた妖力弾の呪縛を解いて、目の前に弾く！…ポーン！

近くの斜面に激突…。ボーン！という音と共に、土砂が崩れた。

込めた妖気は五分の一程。やるじゃねエか、俺！ 自惚れ中…………。

我に返る。この力があれば雑魚妖怪に出会っても何とかなるかも！

「お散歩がてら、ちいーと外の様子でも見に行くか……………」。

尚、巣は斜面に穴を掘ったような形状になっている。外は、斜面なのだ。

ザザザッ！と、斜面を10メートル程下った所で地上に到着。

そこまで高くないのだ。上り下りは簡単で中々、いい物件であるな！

チヨコチヨコ、歩いていると同じ動物を発見した。同士だろうか？

声を掛けようかと思ったが、そんな気持ちもすぐに失せることになった。

相手は、自分よりでかい狐だ。それだけではない。尻尾に注目する。

三尾である。どう考えても、今の俺に敵う相手では到底ない。

「ん…………？何かしら…弱いけど妖気を感じるわ……………」。

それに……………この臭いは、忘れもしないにつくき虎だわ！

しめたわ！アイツの子が巣から逃げ出したのね！ふふふ……………。

捕まえて、食べてあげようかしら……………。それとも……………。」

その先は考えたくない……………。やべエ…………調子に乗りすぎてしまった……………。

身の程知らずにも程があるというものだ。俺は、あくまで赤ちゃん虎だ。

自然界では、まだ食される弱者に分類する。どうにか、逃げねば……………。できるだけ、妖気を隠す……………。頼む、気づかれないでくれ……………。

「あら…………妖気が消えたわね…………。でも、臭いまでは隠しきれてないわ！

……………その茂みに隠れてるんじゃないわ？」

しまった！完全に、ばれてしまったようだ。もう、逃げるしかない。

俺は、全速力で逃げる。すると、狐も目を細めて追ってきた。

「逃げられはしないわよっ！待ちなさいっ！」「チィッ！……………。」

所詮は、虎の子。走れるスピードもたかが知れているようである。
近くに流れていた、川で遂に追い詰められてしまった……………。

「おやおや…。まだ、生後三日もたっていないんじゃないか?」

「余計なお世話だ。アンタ、三尾の狐のようだな。」「ええ、そうよ。」

「あたしはねえ…。ここらで二番目に強い妖獣よ。一番は貴方の母ね。」

憎いわ…アンタの母親に住処と子供を奪われたのよ!

今度は、アイツにあたしと同じ思いをさせてやるんだから!」

そいつあ随分と不幸な話だ…。まさか、俺の母親?が関わっているとは。

しかし、ソレは自然の掟みたいなモノであり仕方がないことだ。

即ち、弱者が狩られて強者が勝つ。……………勿論、俺も例外じゃないのだ。

「そいつぁ、可愛そうに……。だが、俺だってみすみす食われる気はねエ。」

無謀だと分かっている、やるしかねエみたいだし……………」

「あら、怖い！赤子の癖に大人びてるわねえ……。」「ソリヤ、ドーモ。」

すぐさま俺は、尻尾に妖気を固めて放つ。とりま、二分の一程度だ。

「ビュンツ！バシツ！……………」あら、あなたは妖力を使えるみたいね。

でもねえ……。あなたじゃ、まだ力不足と言ったトコかしら……。

成長したら、きっとあなたの母親を超えられるのにねえ……。」

チイツ！……………」さすがは、三尾。尾の数は伊達ではないという事が……。

軽く、尻尾で俺の妖力弾を弾き返してしまったのだ……………」。

次は、俺のありったけの妖気をぶつけるしかねエみたいだな……………」。

「分かった。コイツで駄目なら、諦める。いくぜ！バシユンツ！！」

さっきのより、大きく密度の高い弾が三尾狐目掛けて飛んでいく……。

そして、命中！一瞬の内に俺の頭の中が歓喜で翻っていた。

が、喜んだのもつかの間……。ほぼ無傷の三尾狐が姿を現した……。

「中々、やるわねえ……。二尾の妖獣と言ったトコかしら？」

でも、あたしの尾は三尾。所詮、あなたの敵でないという事なのよ！

さあ、これで最後よ！！！！」

ギラリと輝く狐の目……。鋭く、尚且つ相手に威圧感を与える……。

動けない……。死を感じる……。抵抗も出来ないまま時は過ぎる……。

狐との距離、残り3m……。2m……。1m……。目の前の牙に恐怖を覚える。

「……………嫌だ…死んでたまるかッ！」「死ねえっ！……………ッ！！！」

しかし、今度はもっと驚くべき現象がおきてしまったのだ……

「うああ…あ…あ…。あ、アンタ…何し…た…の？…バタッ！」

三尾狐は倒れた。一瞬、俺の目の前で制止した後に倒れたのだ…。

自分の身で感じた事なのだが、恐らく妖力を吸い取ったのではないか？

――万物を拒絶と吸収する程度の能力――

恐らく、頭に引っ掛かったモノはこの能力の事であろう…。

死が恐ろしくなり拒絶した…。そこから、能力を自覚したんだろう。

ちょっと強引な気もするが、バッチリ死を拒絶してくれている。

そして、何故だか知らないが吸収する能力も発動してしまった。

思い当たる節は、俺もあれくらい妖力があれば…。とか思ったな…。

「おーい、百虎！ソコで何をしておるのじゃ！」「お、母上じゃん！」

見ると、猪が傍らに横たわっていた…。今夜は、猪肉かあ…悪くない。

カクカク、シカジカの事情を母親に説明した……………。

「はあ…おぬしは本当に運がいい…。ここらには、ヒトもいたんじやぞ？」

にしてもだ。よくやったぞ、百虎！さすがは、我が息子じゃ！

三尾狐を討ち取るとは、お見事！やはり、おぬしは天才じゃ。

妖術の教え概があるというものじゃのう！」

すっかり、母上は舞い上がってくれた。そんなに、嬉しいのか？

「のお、ぬしは自分の妖力の力が大きくなつとは思わんか？」

「ああ、そういえば…。吸収した妖力は俺の中に残ったままだ。」

つまり俺は、あの三尾狐を越した事になるわけである。やったぜ！

生後、一日にも満たない俺の立場は一気に向上した！感激です！

でも、うまく扱える気がしないのだ…。そこは、修行で補うのである。

「ぬしの能力の吸収は、お前が意識したものを文字通り吸収するのじゃ。」

物質に関しては、何とも言えぬ…。成分だけ吸収するやも知れん。

そして、それを扱えるかどうかは別問題みたいじゃのお……………」

みたいですね…。妖力球が上手く撃てそうにない……………」

無理やり圧縮しようとした妖気の反発力は半端ではない……………」

放とうとしたら、散り散りになり周囲から煙が上がったようだ……………」

コントロールこそできないものの、これはこれで使えそうな技だ。

「羨ましいのお…。ワシの能力は気まぐれに発動するのじゃが……………」

そうか…。気まぐれで発動するようなモノなら、少し残念だな。

「実は…ぬしに天下を取る義務があると言ったのには根拠があるのじゃ。」

予知能力が発動して、溢れんばかりの力を持つお前を見たのじゃ…。」

「災害程度じゃなくて、そんな事まで予知出来ちゃうんだな……。
じゃ、やる事は一つだな。」「そうじゃのう!」

そうと決まれば、やる事は一つしかない。ことわざもある位だしな!

「夕飯だな!」「修行じゃな!」「ええっ!?」「なぬうつ!?」

いや……俺、疲れたし。腹が減っては何とやらじゃないのかよ!?

「腹が減っては修行はできぬという言葉がある。」「作ったんじゃろ。」

母上は、ため息こそついていたが快く晩飯にしてくれた。

ここからは、余談だが夕飯も修行の一つというわけで……………。

親子？んなモン知るか。非情な血肉の奪い合いが始まったのであった。

あ、そうそう。父親は、旅にでているらしいですよ。

とある某所から、ぱくったようなフレーズを残して……………。

「ぜえぜえ……………大人げないぞ、母上！」「何を言っておる……………」

よく見ると、そこらへんにボコボコとクレーターができていた……………。

「妖力の塊をふんだんに使いおって……………。何を言うか……………」。

まあ、よい。明日からは、精神力をあげる鍛錬じゃ。

その程度の精神力では、三尾狐の妖力すら制御できまい？

それができたら、術も順々に教えていこうぞ。

これの、繰り返しじゃ。なあに、ぬしなら容易くワシを抜ける。

尾の数が三尾になったら旅にでいよいよ天下を目指すのじゃ！」

何かねえ……………。うん。何でだろう。受験生のママみたいだな……………」

…。

ちなみに、尾っぱが三本になるにはどれくらいかかるのだろうか…？

「なあ、母上。尾が三本になるまで、どれくらいかかりそうなんだ？」

「そうじゃのう…。ワシは、8～900年かかったのう……………」

「ゲッ！そんなに、かかんのかよッ！？」
「まあ、待つのがじゃ百虎。」

「それは、個々の才能などで代わるのじゃ。ぬしならそうかかるまい？」

まあ、そうなのか……………？できれば、600～700年くらいがいい。

よくよく考えてみたら、妖獣になって時間が経つのが早く感じるよ
うだ。

だからこそ、妖怪達は長生きできるのかも知れない……………。

妖怪が死んだ時の時間の感覚とヒトが死んだ時の時間の感覚は等しい。

そう考えたら、意外と平等に振り分けられてるのかも知れない。

そんなわけで、一日目からここまで追い詰められるとは思わなかった。

く600年後く

ふあゝ…………。おはようございます。あ、違いますからね？

600年間眠り続けていたわけじゃないんだからな？修行はしたぞ。

え、飛びすぎだと？んな事言われてもなあ…。大人の都合？である。

あれから俺は、母上に技という技を伝授してもらった。

妖力による加速や幻術の見せ方、妖気で周囲にセンサーを張り巡らす等。

本当に、色々である。特に妖気をセンサーに使う術は役に立った。

敵の姿が見えずとも、妖気の揺らぎで大まかな一を把握できるのである。

戦いにおいて…………特に、妖術を使う者に対してはかなり有効な手

段だ。

そして迎えた、今日の朝。尻尾、ついに三本目ですっ！やりましたっ！

三本目とは言え、実力的には母上に匹敵するかそれ以上である。

しかも、能力を使うとなるとまるで話が違ってくるのである。

「母上、遂に三本目だぞッ！……！」「おおっ！遂に来たかこの日が！」

早速、俺は準備をする………と、言ってみたものの特に無い………。

そして、この日は人化を覚えてもらえる日でもあるのだ。

久々、人間に戻れるというわけである。嬉しくないわけがない！

実力的にも、とうにできた事なのだ。だが、お楽しみは最後までつてな。

この日に教えてもらう事にしたのだ。ワクワク！ドキドキ！

「まず、今までに見てきたヒトの波動を真似てみるのだ。

勿論、妖気だ。そして、精神を集中させれば………ヒュッ！」

風を切るような音がしたと思えば、母上が人間になっていた。

いかにも女狐という言葉が似合うくらい上品な顔立ちである。

「よし、俺もだ！え〜と、精神を集中させてと……………ヒュッ！」

俺も遂に、ヒトになりました！どんな顔か……………銅鏡を貸して貰う。

あ、そういえば！母上は、ここの集落の守り神的な存在になったのだ。

いつしか、集落を救ってやったとかで守り神様みたいに称えられたのだ。

そして、こそ変わらないが貢物がちよくちよく来るのだ。銅鏡もその一つ

「ん〜、前世（？）の顔を覚えてねェからな…。何故に不機嫌顔…？」

「さあな。自らの精神力が生み出した顔じゃ。まあ、運よのお……………」

じゃあ、何か？俺が、クジに外れましたよ的な事を言いたいのか？
それでも、人間の姿を手に入れた事は非常に嬉しいのだ。

江戸っ子？みたいな和服に虎耳・尻尾・鋭い爪、が付いた容姿である。

「お世話になりました、母上！」「さあ、もう行くがよい……………」

少し、哀愁漂わせるように語る守り神様ならぬ母上……………。

昔の優しい面影は何処やら……………なんてな！（笑）……………スンマセン……………。

「じゃ、本当に行くからな。」「うむ、行ってくるがよい……………」

いや……………そんな、悲しい目で見られたら安心して出られねエじゃん！

「なあ、俺は、天下の妖獣・天牙 百虎だぞ！見送りくらいさあ……………」

すると、吹っ切れたのか。母上は、いつもの悪態っばい笑みを浮か

べ…。

「行ってくるがよい！天下を取った時は、ワシの宣伝もするんじゃないぞ！」

ソコに居たのはいつもの貪欲な母上であった。うん、変わんねエな！

これで、心置きなく天下を取りに行けるってもんだ！今度こそ…。

「誰がするかよっ！」「なんじゃと〜！」「そいじゃあな〜。」

グダグダであったが、何とか旅立つ事ができた。秋風が心地よい…。

でだ。当ても無く彷徨うのも悪くない。だが、効率がこの上なく悪い。

そついう事で、各地を回りつつ面白い情報を手掛かりに天下を取るのだ。

でもなあ…この時代の有名で強い奴なんて知らねエもんな…。

いや、待てよ…。知名度こそ知れ渡っていないが存在はしている筈だ。

大妖怪は数千年生きているのだ。なら、この時代にもいるんじゃないか？

ふふふっ…………面白くなってきたではないか…………。

では、一言。『最強の白虎に俺はなる！』

そもそも、日本の虎はとくに絶滅してる（後書き）

いかがだったでしょうか？グダグダだったのは僕も分かりますww
原作キャラ問わず、色んな強そうな妖怪を探していきたいと思いま
す。

ある程度、時代を考慮しておけば長生き設定で何とかしよう！みた
いなw

日本の妖怪とか調べてみると、結構エグい奴がわんさかいるんです
ねww

優しい奴から、洒落にならないような事をしでかす妖怪とか……。

でも、そんな妖怪を創造した人間も恐ろしく思いませんか？

雑談はこれくらいにして、そろそろメイン小説にも手をつけねば……
……。

感想・本命のアドバイス等、待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0260z/>

東方 ～最強の白虎に俺はなる！～

2011年12月1日00時51分発行